―新宿二丁目バー「Lewis」―

間接照明がムーディーに演出する店内に、軽快にシェイカーを振る音が響く。バーカウンターの内側できびきび動き回っているのは、カジュアルな開襟シャツを腕捲りし、デニムのギャルソンエプロンを巻いた二十代前半の青年。下に穿いてるのはコーデュロイのメンズパンツ。オフなので制服は着てない。

両耳のイヤーカフス。完璧なアーモンド形の瞳。モデル張りに垢抜けた風貌を引き立てるのは、育ちの良さが滲む洗練された立ち振る舞い。

音楽がサビにさしかかり、足拍子と手の動きが同期する。
手首にスナップを利かせロールアップ、親指を支点にサムロールダウン、スムーズに繋げてウォーターフォール。
手から手にバックトスしたボトルを頭の後ろを通し反対で受けるシャドウパス、背中向きに投げたボトルを後ろ手でキャッチするビハインド・ザ・バックをめまぐるしくこなす。

私服の青年……富樫薫の前には各種酒やジュースに炭酸飲料をはじめ、新鮮な果実の数々が並んでいた。
カクテルの材料に欠かせないレモン・オレンジ・ライムなどの柑橘類、飾り付けに用いるパイナップルやチェリーは勿論の事、南国産のグアバ・シークワーサー・パッションフルーツ・ピタヤなど、通常のスーパーでは入手困難なものも取り揃えた。

ピタヤとはドラゴンフルーツをさし、海外では一般的な名称だ。中国語では火竜果と書き、和名はこれの直訳に当たる。

旅行好きなマスターは三か月に一度店を閉め、どこぞへ羽目を外しにいく。その間キッチンを借りれないか交渉した。

「お店を使いたい？　なんで」

「練習用に。ウチのマンションにも最低限の設備はあるけどこっちの方が断然使い勝手いいし、器材揃ってるんですよね」

「勉強熱心ねえ」

「迷惑かけません。駄目ですか」

「冷蔵庫の補充と後片付けさえちゃんとしてくれれば言うことないわ。薫くんがお留守番買って出てくれるなら却って安心よ、よろしくお願いね」

「ありがとうございます」

「お礼に台湾工芸茶とパイナップルケーキ買ってくるわね、期待して待ってて」

マスターはキャリーカートを引き、上機嫌で旅立っていった。

そして現在、表の扉には「closed」の看板が掛かっている。明かりが点灯しているのはスタッフオンリーのカ

ウンター内だけで、テーブル席は闇に沈んでいた。マスターが快諾してくれたとはいえ、電気代は節約したい。カウンターに置いたスマホからは七十年代の流行曲が流れている。ビリー・ジョエルの「ストレンジャー」。掛ける音楽はその時々の気分次第。ロックやジャズ、民族音楽やクラシックを聴きたい日もある。こと音楽の好みに関しては無節操な方で、身近な人間に感化されやすい。

背後の棚に犇めくのは外国語のラベルが貼られた大小無数の酒瓶。シンクの蛇口は清潔な銀色に輝き、調理場にはカクテルシェイカー・バースプーン・メジャーカップ・ストレーナーが揃い踏み。

「シンガポールスリング。ジン・チェリーブランデー・レモンジュース・炭酸水」

歌うように諳んじ、図解入りレシピを見直す。スマホにメモるより手帳の方が見返しやすい。スタンダードカクテルの項目には折り目が付いていた。

カクテル作りは化学実験に似ている。原料を正確に計量・攪拌し、見栄えよく飾り付けて提供するのがバーテンの仕事。

世界に存在するカクテルは一万以上、有名どころだけに絞っても三千種をこす。まだまだ学ぶことは多い。

美味い酒は人の口を軽くし、秘密を引き出す。

セルフプロデュースの側面が強いバーテンダーは、社交性と自立精神に富む薫の天職だった。

「前に出んな。黒子に徹しろ」

先日の宅飲みで遊輔に駄目出しされた。

「接客業はサービス精神旺盛な話し上手でなけりゃ務まりません」

「ツレと話してる時に邪魔されたくねえ。聞いてもねえ蘊蓄は酒を不味くする」

「飲酒はエンタメですよ」
薫は肩を竦め、もっぱら柿ピーのピーナッツを摘まむ。
「俺はフレアバーテンダーなんで」
「フレア……？」
「ボトルやシェイカー、グラスを用いた曲芸的パフォーマンスを披露してオリジナルカクテル提供するんです。トム・クルーズの映画知りません？」
「バーテン芸人って事か」
「……それでいいです」
「鼻からメントスコーラ飲んだみてえな顔すんな」
三十路過ぎとはたちそこそこのジェネレーションギャップを感じ、話題を変える。
「なんで人に聞かれたくない話するのにわざわざバーに来るんだろ、不思議ですね。家に招いた方が安全なのに」
「アルコールは人間関係の潤滑剤。第一独り身とは限んねーだろ、盗聴器仕掛けられてっかもしんねーし」
「家族を巻き込みたくない？」
「壁に耳あり障子に目あり。人払いの手間考えりゃ店のほうが安心だ、適度に混んでりゃ隠れ蓑になる」
濁った半眼で指折り数え。
「汚職政治家とその秘書、極道と不良刑事、詐欺師とカモと不倫カップル。バーなんてのは間接照明の中でしかお喋りできねースノッブの吹き溜まりって決まってんだ、飛び交うのはチープな嘘とリッチな経歴、連中が落っことした秘密をせっせと回収すんのがお前の仕事」

絡み酒は面倒くさい。遊輔は酔うと愚痴っぽくなる。眼鏡が鼻梁にずれても直そうとしない。
「盗聴器と小型カメラならウチにもあります」
「アキバで買った？」
「日本橋です。大阪の」
「天才ハッカー様の表の顔がバーテンとか盛りすぎだぜ、趣味でやってんの」
「半分は」
「残り半分は？」
「デジタル化済みのデータはパソコンから抜けますけど、対面で仕入れる情報は鮮度が違うんです。そのへんは足使って取材してた遊輔さんの方が詳しいんじゃないですか、記者の経験則ってヤツですよ」
憮然として柿の種を摘まむ。遊輔はピーナッツばかり残す。好みは見事に正反対。
同居をはじめてからリビングで飲むことが増えた。店にいる時は薫がカクテルを作るが、自宅マンションじゃもっぱら缶ビールや缶チューハイを飲む。「手っ取り早く酔いてえのにいちいち気取ったもん飲んでられっか」というのが居候の言い分だ。薫もラクできて有り難い。
缶をもてあそぶ手元を観察し言葉を継ぎ足す。
「カクテルの世界は奥深いんです。ベース配分や継ぎ足しの分量、シェイクの回数で仕上がりがまるで違ってくる。こんなふうに」
柿の種とピーナッツをランダムに並べ替える。
「プレーンテキストへの書き込みに癖出るあたり、プログラミングとちょっと似てます」
「そうかあ？」

「ソースコードはソフトウェアのレシピって言いません？　言わないか」
懐疑的に語尾を伸ばす遊輔をよそに、ピーナッツを齧る。
「基本疎かにして泣きを見るのはどの業界も一緒」
「雑にまとめやがって」
ストロングゼロを嚥下し、遊輔が聞く。
「なんだってバーテンに？　こっちで稼いでんじゃん」
両手で何かを弾くまねをする。
「パチンコはやってません」
「ハッカー業だよ、わかって言ってんだろ」
「俺のこと裏社会のフィクサーかなんかと勘違いしてませんか」
「物は相談なんだが、口座残高増やせる？」
「五円を五十円に繰り上げるんですか」
「五百円は残ってる。多分」
「断言しましょうよそこは」
「皐月賞買うとき下ろしちまって……今度こそイケるって確信したんだけどな、バンキシャテッペントッタレ」
「八万溶けたって荒れてたあの？」
「惜しかったんだよ最終コーナーで引き離されて。お陰で焼肉おごる約束パア」
「守られたことないんで期待してません」
「……優しい顔で酷いこと言うよなお前」

「万一競馬で当てても他のギャンブルに全額突っ込むのが遊輔さんでしょ」
「ゼツリンタネウマテイオーに賭けりゃよかった」
「名前で選ぶのやめません？」
「ンなこたどうでもいいんだよ、お前がバーテン目指した理由聞いてんの」
「成り行きですかね。向いてるって勧められて……どのみち手に職付けたかったし」
「資格はいらねえの」
「持ってた方が有利なのは確かだけど、必須じゃないですね」
「どんなのあんだ」
「N.B.A認定バーテンダー資格証書、バーテンダー呼称・技能認定試験、N.B.A認定マイスターバーテンダー称号証書」
「バスケと関係が？」
「日本バーテンダー協会の略。普通に働くぶんには問題ないけど、コンペティションによっては資格の有無が問われます」
「そういうの勉強してんの」
「必要感じたら取ります」
「言うじゃん。落ちるとか思ってねえな」
「ハッキングしますし」
「……」
「冗談ですよ。仮に試験問題盗み見たところで実技が水準に満たないんじゃ話になりません」

ストロングゼロで柿の種を流し込む。
「ショートカクテルが氷ぬきの意味って知んなくて、若え頃恥かいた」
「通常一分から三分、三口で飲み切るのが理想とされてますね。ロングカクテルは氷入りカクテルのことで、ある程度時間がたっても冷たいまま飲めます」
現役バーテンダーの講釈にいじけ、親指と人さし指でちょこんと幅を示す。
「グラスが小せえからショートだと」
吹き出す。
「可愛い」
「るっせ」
「嫌いなら食べましょうか」
薫の指摘でピーナッツの小山に思い至り、バツ悪げな顔をする。
「柿の種残してんじゃん。辛いの苦手？」
「揚げ足取りとは大人げない」
「そっちが先に」
「交換します？」
「フェアトレード？」
「ギブアンドテイクの精神です」

引きこもるのに飽きたらキッチンで気分転換を図るのが日課。どちらにせよ根の詰めすぎは体に毒、時間配分は効率よく行きたい。一日二十四時間、人生は有限なのだ。

「マルガリータ。テキーラ・ホワイトキュラソー・ライムジュース」

手を動かしてると気が紛れる、余計なことを考えずにすむ。たまにどちらが本業で副業かわからなくなるが、手先の器用さと柔軟な発想、アクシデント発生時に臨機応変な対応を求められるところは共通だった。

マスターが薫の申し出をあっさり快諾したのは、彼が売り上げに貢献しているから。

真面目な働きぶり、丁寧な接客、確かな技術。おまけにルックス上々ときて、バーテン目当ての客が引きも切らずに押し寄せる。特に女性が増え、甘口で飲みやすいカクテルの需要が上がった。柑橘類の爽やかな酸味とリキュールの甘味がウイスキーの濃厚な風味を引き立てるマルガリータは、初心者に勧めやすい。

マルガリータにはレモンジュースとライムジュース、二種のベースレシピがある。今回はライムジュースを使用した。理由は単純、同居人の好みだから。

レモンの重しで手帳を押さえ、颯爽と準備に取り掛かる。遊輔は「くどい」「うるせえ」「長え」と腐すが、カクテルの成り立ちに纏わる雑学やカクテル言葉は、場繋ぎの知恵として覚えておいて損はない。

待ち合わせをすっぽかされた女子大生にはあるがままにジンフィズを捧げ、恋人と喧嘩した会社員にはモスコミュールで仲直りを促し、同棲十周年を祝いに来たゲイカップルには似た者同士をほのめかすモッキンバードを差し出す。これまでもデート相手を待ち惚け、引き際を見誤った男女を慰めてきた。

レッド、ブルー、オレンジ、グリーン、ホワイト、イエロー、パープル、ブラック、ピンク、ゴールド。宝石みたいにきらきら光るカクテルが好きだ。カクテルで人を笑顔にするのも好きだ。ライムの搾り汁でグラスの縁を湿し、食塩の冠雪をまぶす。続けざまにフリップ・グリップ・キャッチ、混ぜ合わさったシェイカーの中身を優雅に注ぐ。

「マルガリータの由来ご存知ですか」
「馬鹿にすんな、さすがに知ってる。アレだろ、流れ弾で死んだオンナの名前」
「恋人に先立たれた気の毒なバーテンの名前は」
「知んね」
「ジャン・デュレッサー、全米カクテルコンテスト三位の実力者。作り話だけど」
「え〝」
「ジャン・デュレッサーなんて人物存在しません。同年代に活躍したジョン・ダレッサーがモデルじゃないかとは言われてますが、彼の恋人が痛ましい事故で亡くなった事実は皆無です」
「へえー……」
「信じてたんですか？」
「なんでそんな手の込んだ作り話広まったんだ」
「知りません」
「オチがねえ」

「哀しいエピソードと抱き合わせで出荷した方が人気でるって踏んだんでしょ」
「フィクサーが？」
「カクテルに素敵なお話は付き物。世のドラマの大半はフィクションなんです」

四六時中バーに入り浸ってるくせに、そのへん遊輔は疎い。
シェイカーの雫を切り、凪いだ水面を見詰める。色は僅かに緑がかった乳白色で、スノースタイルに映えるコントラストが美しい。カクテル言葉は無言の愛。言葉はなくても愛は伝わる。
「だったら苦労しないんだけど」
皮肉っぽく口角を上げ、ガラスの脚を支える手を見下ろす。
バーテンダーは手が命。薫も爪切りとハンドクリームを持ち歩き、スキンケアを徹底してる。以前付き合った男も爪を短くしていた。
一口味見したマルガリータを照明に翳し、過去を想い起こす。
高校卒業してすぐ家を出、夜の街で知り合った男や女のもとを渡り歩いた。ＳＮＳやマッチングアプリを通し出会った者もいる。
大抵は年上の社会人で、色んなことを教えてくれた。
父親の次に関係を持った男は海外のコンペティションで何個も賞を獲ったバーテンダー。同棲生活は半年続き、男の逮捕で終わった。

薫に惹かれた人間は身を滅ぼす。

「余計だったかな」
練習用のグラスに塩をまぶす必要はない。にもかかわらず付けてしまったのは遊輔が好むから。曰く、塩を舐めながらじゃないとマルガリータは甘すぎるらしい。
眉に唾、舌に塩。それが作り話を見分けるコツ。フェイクニュースを量産してきた居候の持論を回想し、口元を緩める。
「見抜けてないじゃないですか、全然」
だしぬけにスマホが鳴る。液晶に表示された番号を一瞥、首を傾げてボタンを押す。
「もしもし」
「薫？　久しぶり、元気してたか」
懐かしい声に驚く。即座にスピーカーに切り替える。
「帰ってたんですか。海外にいるって聞きましたけど」
「横浜に店出す事になった。その準備に」
「おめでとうございます」
「どうしてた」
「ぼちぼちやってますよ」
「バーテン続けてるのか」
「お陰様で」
「よかった」

「何が」
「勧めたの俺だし」
「働き口紹介してもらったのは感謝してます」
ステンレスのシンクに凭れて淡々と話す。相手がおずおず切り出す。
「会えないか」
「なんで？」
「より戻したい」
「その気はありません」
「半年一緒に暮らしたのに？　めでたく独り立ちできたのは俺が手取り足取り教えてやったからだろ」
「店に引っ張り込んだのは監視の為でしょ」
「……一緒にいたかったのは認める」
「縛り付けておきたかった？」
足首を括る手錠を回想し、苦々しげに吐き捨てる。
「本当にやるとは思いませんでした」
「薫、」
「別に恨んでません。憎んでないし興味もない。自分の馬鹿さ加減と見る目なさにがっかりしただけです」
正面に視線を逃がす。アンティークキャビネットが鎮座し、マスターの旅行土産のメキシコ雑貨が飾られていた。
カラフルな髑髏に花を描き込んだゲレロ・カラベラ、グアダルーペの聖母をペイントした教会キャンドル、酸

化で味を出したブリキの民芸品オハラタ、木彫りの守護動物アレブリへを退屈げに眺める。
「大麻は？」
「合衆国じゃ合法」
「やめてないんだ」
「……」
「初犯は不起訴処分か」
「一回だけ会ってくれ。忘れられない」
「俺といるとダメになりますよ」
「昔のこと根に持ってんの」
「強姦は非親告罪になりました」
「喧嘩の延長だろ」
「バスタブに監禁するのが？」
塩をちょい足ししたマルガリータを舐め、やんわり脅す。
「新しいお店始めようって時に、未成年に対する余罪がバレちゃ致命傷負いませんか」
「悪かった。許してくれ。あの時はどうかしてた、お前が他のヤツに色目使うから」
「二度と掛けてこないでください」
終了ボタンを押し、かすかな手の震えを恥じる。

薫に惹かれた人間は身を滅ぼす。

『昨日どこいたの？』
『なんでメール無視した？』
『浮気してるってわかってんだぞ、さっさと携帯よこせ！』

ある者は嫉妬に狂って暴力を振るい、ある者は独占欲が高じて束縛に走り、ある者は精神を病んで酒や薬に溺れ、いずれも破滅していった。
どうしてそうなるかはわからない。薫は普通にしているだけ、ただそれだけで周りが勝手に壊れていく。
あの男もそうだ。
「……出るんじゃなかった」
着信拒否しておけばよかった。機種変の時に番号を削除し、今の今まで忘れていた。薫にとってはどうでもいい人間だ。
マルガリータを飲み干し、サッと洗ったグラスを伏せて置く。その後は早めに切り上げ、バックヤードのロッカールームに引っ込む。
ロッカーを開けた瞬間、上段の紙袋が目に入る。来る途中に買って来たものだ。
ブランドロゴを印刷した紙袋をまさぐり、熱心に見繕った中身を取り出す。
「喜ぶかな」
丁寧な手付きで返し、さっさと帰り支度をする。車の運転席でＬＩＮＥを確認した所、ここ四時間内のメッセー

ジは既読済みで捨て置かれていた。『帰ります』とスタンプだけ送っておく。

ドアを開けた直後、玄関に揃えて脱がれたパンプスに違和感を覚える。
嫌な予感に急き立てられ、慌てて靴を脱ぐ。向かって右側、リビングに通じるドアを細く開けて覗き込む。カウチベッドで折り重なった影が蠢く。下に寝ているのは裸の女、上にいるのは……
「やめないで。もっとシて」
しなやかな脚を押し広げ、口で愛撫する男の姿に息を飲む。
「何してほしいんだ」
「言わせないで」
「すげー濡れてきた、指も入れてねえのに」
「クンニ上手。他の子にもやってんの」
「お前だけ」
風祭遊輔は上半身裸だった。リビングの明かりは消え、暗闇に背中が浮かぶ。
「よくなりてェなら集中しろ」
「あっァっンあっあ」
股間に顔を埋めて蜜を啜り、唇と舌でほぐす。官能的な声の高まりに比例し、覆い被さった背中が動く。女が遊輔の頭を抱え、息を荒げて囁く。
「どうかした？」
「何？」

「手の火傷。根性焼き？」
「寝タバコで焦がした」
「ばっかじゃない」
骨ばった右手を捕らえ、いやらしく指をしゃぶる。
「気が散っからやめろ」
「続けてよ」
くぐもった笑い。しめやかな衣擦れの音。互いのこめかみを啄んでじゃれあい、くすくす囁き交わす。
「いい部屋引っ越したね。お金持ってるんだ」
「まーな」
「記者ってもうかんの」
「スクープ物にすりゃボーナスがっぽり」
「何追っかけてんの」
「厚生省の大物と医療ミス起きた病院の癒着」
「ラズベリー賞狙える？」
「そりゃクソ映画に贈る賞だろ、マスコミが目指すのはピューリッツァー賞」
「イグノーベル賞の方が面白いよ」
「面白え面白くねえの問題か」
「それとったらタワマン住める？」
「住める住めるワンフロアぶち抜きで。一緒にジャグジー入ろうぜ」

「やっぱ寝室行かない？」
「鍵なくしちまって」
「なんで寝室に鍵掛けてんの」
「大事なもんしまってんだよ」
「たとえば？」
「これまで書いた記事の資料」
「怪しい～。見られたらヤバいもん隠してんじゃないの、エグいＳＭグッズとか」
「道具に頼んなくたってイかせられる」
「ンっ、ぁっ、いい」
「感じてんの？　股びしょびしょ」
「息当たるから喋んないで……」
そろそろ頃合いだと判断し、壁のスイッチを押す。
「水臭いなあ、お客さん来てるなら紹介してくださいよ」
「「ッ!?」」
リビングの全容が暴かれ、前戯を妨げられた男女が凍り付く。
「誰!?」
「家主ですが」
「ここ遊輔の……」
ブラホックを留めた女が表情を豹変させ、音速で顔を背けた遊輔を睨む。

「だましたの？」
「違えよ、本当に住んでんだって」
「リビングに間借りしてる事を住んでるって表現するなら間違いじゃないですけど」
クッションが飛ぶ。
「全然変わってない！　相変わらず嘘ばっか！」
「話聞けって！」
「死ねよパチカスヤリモク眼鏡！」
玄関まで追い縋るも和解ならず、腹立ちまぎれにゴミ箱蹴倒す居候を、不機嫌に腕組みした世帯主が待ち受ける。
「もー三十分遅く帰ってこい」
「十分じゃ足りませんか」
「早漏か」
「マンション譲渡した覚えないんですけど」
「嘘も方便」
興醒めした様子で髪をかき上げ、外箱の角を叩いて煙草を抜く。いかにも億劫げな受け答え。
「帰ったの気付きませんでした？　知ってて続けたんですか、いいご趣味ですね」
「防音しっかりしすぎて聞こえねー。家賃高えのも考え物だな」
「口使うのに忙しかったんじゃないですか」
「ご明察」

開き直って煙草をふかす。貞操観念の緩さと羞恥心の薄さは比例するのか、情事を見られた後ろめたさは微塵も感じられない。
「人の留守中に女性引っ張り込んで乳繰り合ってんですか」
「会って飲みゃそーゆー流れになる」
「俺が買ったカウチでさかるならホテル行ってください」
「反省する」
「胡座で？」
「正座に直りゃ文句ねえ？」
「二十点」
にっこり笑って咥え煙草をもぎとる。
「五十点になりました」
遊輔がうんざりする。
「何すりゃ百点になんだよ……ファブリーズ？」
「換気もお忘れなく」
「開かずの間にゃ一切立ち入ってねえぞ」
「どうかな。ピッキング前科あるし」
「ありゃお前を助けるために、」
無造作にシャツを放り、もぬけの殻の玄関を振り返る。
「誰ですあれ」

「昔の女。何年か前付き合ってた」
「元カノをセフレキープとか見損ないました」
「後腐れねェし」
「後腐れのあるなしで女性選ぶの控えめに言って最低です」
「ぐ」
ご老公の印籠の如くスマホを突き付け、『帰ります』と吹き出しに入ったうさぎのスタンプを示す。
「証拠隠滅の時間はあったはずですけど」
「見てなかった」
「厚生省の大物追いかけてるんですか？」
「……見栄張った」
不貞腐れてシャツに袖を通す。
カウチに面したローテーブルには新品のコンドームと飲みかけの缶ビール、競馬欄に〇×チェックしたスポーツ新聞とゴシップ週刊誌が放置されていた。
その中から未開封の小袋を選び取り、冷ややかな感想を述べる。
「避妊して偉い」
「返せ」
「別のメーカーに乗り換えた方がいいですよ、最中に破けたとかで低評価付いてました」
「マジ？」
「シャワー行ってきます」

横を素通りしバスルームへ急ぐ。脱衣所のドラム式洗濯機に服を投げ込み、磨りガラス入りスライドドアを開け、適温に調節されたシャワーを浴びる。

渦を巻いて排水溝に流れ込む湯。タイルの溝に張り付く長い髪の毛に舌打ち、水圧で押し流す。

フックにノズルを掛け、キツく蛇口を締める。脱衣所でパジャマ用のトレーナーに着替え、洗面台の前に佇む。

「やっと消えた」

ツッと指を滑らし、痣が癒えた首筋をなぞる。鏡に映る像が歪み、中学生の少年にすり替わる。

十四歳のある朝の出来事だ。
父はドラマの撮影で不在。母は朝食の準備をしており、騒々しいミキサーの音が響いていた。
「おはよ。顔洗っちゃいなさい」
「うん」
健康志向の母は毎朝スムージーを作り、オーガニックな朝食を用意した。
洗面台の蛇口を開く。迸る水を手で受け顔を濯ぐ。
濡れ髪の雫をハンドタオルで拭い、鏡と向き合った瞬間、首の痣が目に飛び込んできた。
夢じゃなかった。
「あんたなんか死ねばいいのに」
凄まじい形相の母に首を絞められた。夢だと思った。思いたかった。途中で意識が途切れた。目が覚めたら朝で、母は台所にいて、ミキサーがうるさくて
洗面台に突っ伏し少し吐く。苦い胃液が糸を引く。
実際の所、母は何も言ってない。深夜になるのを待って息子の部屋を訪れ、気を失うまで首を絞めただけだ。
それも未遂で済んだ。殺意の立証は難しい。

動機は嫉妬。
夫を寝取られた復讐。

どんなに否定したくてもハッキリ証拠が残ってる、首周りの痛々しい鬱血痕が現実を物語る、青黒い色素が定

着した痣は母の指の形状とぴったり重なるはず。
口が苦い。首が痛い。気持ち悪い。膝から下が挫けて座り込んでしまいそうだ。
「遅刻しちゃうよー」
ミキサーの騒音が止み、台所の母が呼び立てる。義務感だけで起き上がり、うがいをすませて部屋に戻る。シャツに袖を通す。一番上までボタンを留めて痣を隠し、スタンドミラーに映す。
ベッド脇のコートハンガーには、ネイビーブルーの前襟に白いラインが入ったブレザーが掛かっていた。
制服に着替えてダイニングに行けば、タンブラーにスムージーを注いだ母が、若作りな笑顔で出迎えた。
「遅かったね。食べちゃいなさい」
「いただきます」
席に着く。朝食が始まる。
「父さんは」
「信州ロケですって。明後日には帰ってくるそうよ」
「そっか」
「お母さん午後からジムだから留守番お願い」
「わかった」
「ちゃんと塾行きなさいよ、成績下がってるんだから」
「うん」
「昨日は眠れた？」
「なんで。寝れたよ」

「ならいいけど……最近寝不足気味でしょ、心配なのよ。ウチは中高一貫の私立だから受験は関係ないけど」
「ホントに大丈夫。ネトゲのイベント走ってて、うっかり夜更かししちゃった」
ベランダの雀の囀り。掃き出し窓から差し込む陽射し。
「最新のゲーミングＰＣ気に入ったみたいね」
「画素数多くて最高」
「そういうのよくわかんないけど」
「前のと処理速度段違い。次は自分で組み立てる」
「できるの？」
「父さんに教えてもらった」
「ああ……思い出した。小学生の時だっけ、夏休みの自由研究で自作ＰＣ提出したでしょ。早熟なお子さんですねって先生に驚かれちゃった」
「自作ならどこに何の部品使ったかわかってるからメンテ費用浮くし、そっちの方がリーズナブルだって父さんが」
味覚が死んだ。朝食の味がわからない。機械的に咀嚼と嚥下を繰り返し、辛うじて話を合わせる。
寝不足なのは父のせいだ。母は知ってて知らないふりをする。
「あなたには甘いのね」
母が目玉焼きを切り、ドロリと濃い黄身が流れ出す。
「部屋の掃除してね」
「わかってる」

「シーツ取り替えるのよ」
ガラスボウルによそわれたサラダ、こんがり焼けたバタートースト、半熟の目玉焼きと付け合わせの無脂肪ベーコン、フレッシュなグリーンスムージー、化学調味料無添加にこだわり抜いたヘルシーな献立。
食欲が減退する。スムージーに口を付ける。
「何入ってるの？」
「小松菜と完熟バナナ。牛乳はオーツミルクに替えたわ、そっちのほうが栄養価高いらしいの。おいしい？」
「まあまあ」
「ひっかかる言い方」
「ヨーグルトの方が好きかな」
「明日はアーモンドミルクね」
義理で一口飲み、タンブラーを静かに置く。毒を盛られたかもしれない。砒素は無味無臭だ。混ぜられても気付かない。
作り笑いでモノを飲み下すたび喉が痛む、何かが閊えたような異物感が膨らんでいく、糊の利いた立襟の刺さる首が疼く。
思春期の息子が母親の入室を嫌がるのは自然なこと。何もおかしくない普通の会話。子供の自主性を重んじるのが彼女の教育方針、言葉の裏を読む方が間違ってる。
慢性的な寝不足の原因が父にあっても。
父が来ない日も父の気配に怯えて寝付けず、ふらふら登校する羽目になっても。

ねえ母さん、昨日の夜部屋に来なかった？
俺の首絞めなかった？

本当に知らないのか。知らないふりをしてるだけなのか。喉元まで出かけた質問を飲み下し、努めて平静を装い食事を続ける。向かい席の母は頑なに目を合わせず、ダイエットに失敗し、倍近くリバウンドした友人の話をしている。薫はミニトマトのヘタをとって相槌を打ち、笑いながら口に運ぶ。
誕生日や祝日にプレゼントされ年々増えてくアダルトグッズ。隠し場所は机の一番下の引き出し。鍵は父が管理している。
一昨日は新品のボールギャグとベルト型バイブを試された。ギャグを噛まされた口から大量の涎を垂れ流し、陰茎に装着されたバイブに悶える息子の痴態を眺め、父はマスターベーションに耽った。
先週は乳首と亀頭と前立腺をローター四点責め。その前の週はニップルポンプで乳首開発。その前の前の週は股間にジッパーが付いたラバー下着を穿かされアナルビーズを限界まで……。

心底鈍感な人だったのか、鈍感なふりをしてただけか、結局わからずじまい。父の死をきっかけに母とは疎遠になり、現在はほぼ連絡を取り合ってない。

母の旧姓を使うのは世間を欺く為。それ以上に父の姓を名乗りたくないから。

薫の父、蓮見尊は俳優だった。インタビュー記事には必ず「愛妻家で子煩悩」と書かれていた。

父は色々なことを教えてくれた。

自作ＰＣの組み方を教えてくれた。自転車の乗り方を教えてくれた。フェラチオを教えてくれた。オーガズムを教えてくれた。精通のメカニズムを教えてくれた。調教すれば男も乳首でイケると教えてくれた。ニップルポンプを使われた翌日は勃ちっぱなしの乳首が肌着に擦れて痛痒く、死ぬほど恥ずかしかった。

快楽に抗いきれない体の反応を呪った。何も気付かない母を憎んだ。

父は愛妻家を演じる役者だった。家の中でも外でも演技していた。良き父良き夫の芝居は完璧で、プロデューサーやマネージャー、共に暮らす家族さえも本性を見抜けなかった。

夜寝る前にはハーブティーを淹れた。リラックスできるよと唆され、母はそれを飲んだ。

『母さんは起きないよ。今頃はぐっすり夢の中だ』

夫が睡眠薬を混ぜたのを知らず。

『声を上げてごらん』

強く目を閉じて残像を断ち切り、洗面所に沿った廊下に出る。遊輔が待っていた。
「まだ何か」
そっけなく聞けば、気まずげに頭をかいて返す。
「……他の部屋入れてねーから。被り物も見付かってねえ」
「そこまで軽率だとは思ってませんよ」
薫たちは動画サイトにチャンネルを持ち、法で裁けない犯罪を暴いている。コンビ名はバンダースナッチ。少し前に逮捕された殺人鬼とも接触していた。
バンダースナッチは正体不明だ。
告知に用いるＳＮＳと最低月一で更新する動画の他は一切情報を公開せず、撮影時は被り物をする徹底ぶり。盗聴盗撮ハッキングを筆頭に法に触れる行為を多々しており、大っぴらにスタジオを借りるのも難しい。動画撮影、およびライブ配信は薫のマンションから行うのが常だ。
もしもあの女がフォロワーで、動画の背景と内装の一致に気付いたら……。
「次からよそでしてください」
「ああ」
遊輔の女遊びを禁じる権利はない。咎める資格すらない。彼等は恋人同士ですらないのだ、残念ながら。
胸の内のモヤモヤを飼いならす薫をよそに、遊輔が紙袋を突き出す。
「リビングに忘れてたぜ」

「！」
咄嗟に奪い取り、声を潜めて牽制する。
「中見ました？」
「見てねェけど……あっこら」
無視して歩き出せば、案の定肩を掴んで引き止められた。
「持ってきてやったんだから礼くらい」
「まず謝ってください」
「はあ？　なんで」
「俺の家ですよ」
「その件なら片付いたろ。もうしねえよ、これでいいか」
いい加減キレそうだ。遊輔を押しのけ廊下を進む。
「今の時間まで店にいたのか」
「だったら？」
「根詰めすぎじゃね？　息抜きしろよ」
「ご心配なく、ちゃんとペース配分考えてるんで。俺みたいな半人前は手と指に覚えさせなきゃいけないんです」
「オンでもオフでもシェイカー振って夢ん中でもシャカシャカやってんの？　職業病極まれりだな」
立ち塞がる遊輔に対し、凶暴な衝動が湧く。
「どんな夢見てるか知りもしないで」

部屋に駆け込んで施錠する。がちゃがちゃノブが回り、激しいノックが鳴り響く。
「てめえ薫！」
「次の標的は日下部智則、中堅音楽プロダクション『コスモミューズ』社長。ミュージシャン志望の女の子を食い物にするクズ」
ノックが止む。
「そっちの進捗は」
「……裏はとれた。偽契約書手に入れんの難儀したけど、芸能方面に強ェ奴がいてさ」
「こっちも順調です。事務所のＰＣに遠隔で仕込んだカメラも問題なく作動してます」
深呼吸を挟む。
「だから、ほっといてください」

薫は薫の仕事をする。
遊輔は遊輔の仕事をする。
それ以上は干渉するなと、ドア一枚隔て線を引く。

「―そうかよ」

諦めて引き返す足音。徒労感と虚しさが募る押し問答を終え、ドアから離れる。
薫の私室に遊輔は立ち入れない。外出中は鍵を掛ける習慣だ。ここには見られたら困るものが沢山ある。

たとえば、隠し撮りした写真とか。

廊下の突き当たりのドアの奥、寝室の壁には夥しい写真が貼られていた。スマホから印刷したものはもちろん、卒業アルバムの個人写真を引き伸ばしたものや興信所に盗撮を頼んだものも含まれる。薫自身が尾行して撮った写真も多い。

遊輔は被写体の八割を占めた。残り二割は関係者。元同僚・元上司・元恋人、そして母親。

壁には画鋲が打ち込まれ、そこに赤い糸を引っかけ、写真同士を立体的に結んでいた。相関図の中心には出版社のビルに入ってく遊輔がいた。

この手法はウェビングといい情報整理の基本だ。ノートに纏めるのが一般的だが、海外ドラマではコルクボードを使用することが多い。

シリアルキラーの部屋みたいだな、とひっそり自嘲する。

紙袋をベッドに投げ置き、遊輔を中心に展開した相関図をじっくり見直す。

薫の趣味は遊輔の記事をスクラップすること、自室の壁に遊輔のポートレートをコラージュすること。

「貴方のことなら何でも知ってます」

たとえば愛用する煙草の銘柄、コンドームの種類、家族構成。

遊輔は貧困家庭で生まれ育った。母親は風俗嬢、父親は不明。家庭環境は劣悪で、母は外泊を繰り返し、小学生の息子を一週間以上放置したこともある。

同じ小学校の卒業生から買った卒業アルバムを開く。眼鏡のフレームをセロハンで補修した遊輔が、集合写真の中央列端っこでふてくされていた。髪はぼさぼさで擦り傷だらけ、季節外れの半袖半ズボンが目立っている。切れた唇の端には絆創膏。喧嘩っ早い子供だったらしい。

それとも、母親の恋人にされたのか。

遊輔の母は男の趣味が悪い。連れ込んだ男は子供を殴った。近所から通報が行き、児童相談所に保護された記録が行政機関に残っている。養護施設にも数回出入りしていた。
中学に上がった頃からますます親が寄り付かなくなり、ほぼ一人暮らし状態と化す。
よそで男と暮らし始めた母親はごくまれに帰宅し、ちゃぶ台に金を置いてまた消える。生活費の不足分は年をごまかし、まかないが出るキャバレーで稼いだ。
一番荒れていたのは高校時代。区内で最も偏差値の低い高校へ進み、地元の不良と喧嘩に明け暮れる。
学ランに咥え煙草でパチンコを打ち、台パンする遊輔の写真に手を翳す。遊輔が当時入り浸っていたパチンコ屋の店長が、迷惑行為の証拠としてこっそり撮ったブツで、手に入れるのに苦労した。

「遊輔さん」

風祭遊輔の人生をコレクションするのが富樫薫のライフワーク。
実年齢では決して追い付けないからこそ、過去の断片を偏執的にかき集め、現在に至る痕跡を辿ろうとする。

なのに何故満たされないのか、集めても集めても渇望が癒されないのか。

「ッ、は」

動画を再生し、スマホをベッドに放る。ズボンのジッパーを下ろし、萎えた陰茎を引っ張り出す。

『なんだってこんなまだるっこしい、ッは、監禁まがいのまね』
『怖いですか。声、震えてますけど』
『誰が』
『甘やかされたセックスしかしてこなかったんでしょ、どうせ』

映像と音声が流れ出す。生々しい衣擦れと息遣い。スマホの窓の中、幅広の布で目隠しされた遊輔が弱々しく身悶える。両手は手錠で拘束されていた。

『かお、る、手ェどけろさわんな、ッぐ、はぁ』

仰け反った遊輔が切ない声で喘ぐ。手錠の鎖が伸び切り、ベッドパイプとうるさく擦れる。
ハメ撮りされた事実を遊輔は知らない。視覚を封じられた焦りと混乱、恐怖と嫌悪に顔を歪め、前を大胆に開

かれたシャツから引き締まった裸をさらす。
横に寝かせた画面の中、薫の手がズボンを寛げていく。

『遊輔さん、メスイキしたことないでしょ』

トランクスをずらす。カウパーにぬら付くペニスが露出する。

「っは」

生唾飲んで痴態に見入り、前屈みで股間をしごく。まさか撮られてるなどとは思いもしない遊輔は、上半身に申し訳にシャツを引っかけ、下半身をわななかせて懇願する。

『かお、る、抜け、苦しッ、ぁぐ』

生理的な涙と汗で湿った布が張り付き、眼窩の形を浮かす。引き締まった体が痙攣し、跳ね、弛緩しきった口から涎が糸引く。
しどけなくばらけた前髪、苦痛の皺を刻む眉間、セクシーな首筋。喉仏の尖りを汗が伝い、鎖骨のくぼみで弾ける。

『目隠し、とれ、頼む、見えねッ』

三十路過ぎるまで女を抱いたことしかないノンケの男が、ひと回りも下の若造のテクに堕とされ、みっともなくよがり狂って。

「ん〝っ、ん」

カウパーの濁流にまみれたペニスが勃起し、力強く鎌首もたげていく。（続）